

山田美妙の「勢至丸」草稿について

谷 川 恵 一

明治三十六年五月、これから「世話物」と融合した新しい「時代物」を書くと言った山田美妙は（「時代物の掲載について」、「日出国新聞」明治三六・五・三二）、以降、明治四十三年のその死まで、作中人物たちが「世話物」と同じことばで話す新しいタイプの「時代物」を次々と世に問うていった。かつて「左様でおじやる」（「武蔵野」、美妙「夏木立」明治二一・八）など、作品に設定された時代のことばづかいに引き寄せられていた作中人物たちの発話を、「京都三界へ顔を曝すのか。それこそ生き恥ぢぢや。勿論夫も是非に及ばぬ」（美妙「史外史伝 平重衡」四、明治四三・六）といった、「現時代ノ風俗ヲ写ス」（「世話物」（美妙「大辞典」明治四五・五）とみまごうことばへと転換させたのである。「自分はそれこそ明日か今日あたり現在直実その人に逢ひ、したしく口を利いた事でも有るかの氣に為つて、全くのところ是から書く」（「側面から觀察した 熊谷直実」まへおき、「日出国新聞」明治三七・二・二四）というのは、新しい「時代物」に向かおうとした際の美妙のスタンスを端的に示すことばである。

この美妙後期の「時代物」は、その最初の試みである『金忠輔』（明

治三七・二）が金朝の後裔である仙台藩士を主人公としているのを別にすれば、それらがどのような人物を主人公に据えているかによって、「上人物」「佐佐木物」「平家物」の三つに分けられるが（塩田良平『山田美妙研究』第四章第二節、一九三八・五）、「勢至丸」は、「性空上人」（『文芸倶楽部』第十卷二号、明治三七・二）および未完のまま遺された「親鸞聖人」（『美妙選集』上巻、一九三五・一〇）とともに「上人物」の一つに数えられる。塩田良平はこの作品を「晩年の不遇を切りぬけようとして思ひを聖僧の生涯に致して、そこに寂漠の喜悦を悟らうとした」ものとみなしている（前掲書）。みずから編んだ『仏教格言集』（明治三三・三）の「緒言」で「仏教書類の中に散見せる機警なる句を手録せしものを些しくは世に出だすも珍らしからん」と美妙は述べており、こうして「仏教書類」に親しんでいたことを基盤として着想されたのだろうが、より直接的な執筆の契機としては、やはり中絶した「側面から觀察した 熊谷直実」の構想を挙げるべきだろう。一ノ谷の戦いで名を馳せた熊谷直実が出家して蓮生となつてからを描こうとした「側面から觀察した 熊谷直実」は、金

貸しをしていた藤枝の長者が通りかかった蓮生をなぶりものにしようとして逆に改心させられるまでを描いた上編のみで中絶し〔日出国新聞〕明治三七・三・二二）、「一の谷で如何やうな機会から敦盛卿を手に掛けたか、然る後また如何やうにして直実が遁世して蓮生と為つたか」をみずから人々の前で語る続編は書きつがれなかったが、そこには、つとに源平盛衰記に描かれ、また明治の新体詩が「つひに其の身は法名を。蓮生坊と名のりつ、／いそぎ都に登りゆき。元祖大師を師と頼み／剃髮禪衣の身と成て。昼夜念仏をこたらず／目度往生し給ひけり」と歌った〔熊谷直実晩に敦盛を追ふの歌〕、竹内隆信編『新体詩歌』、明治二〇・二、船井弘文堂）直実と法然との出会いが語られるはずだった。直実の物語に登場する法然を、こんどは主人公として描こうとしたところに「勢至丸」の構想が生れたと考えられる。

作品のタイトルとなった勢至丸は、浄土宗の開祖である法然の幼名。美妙の『大辞典』は「せいしまろ（勢至丸）」の項に「源空ノ幼名」とのみ記して、詳しくは「源空」を参照させる。

げんくう（源空） 名 高僧。美作国稲岡ノ人。父ハ源時国。源光ノ末。幼名勢至丸。保延七年、父ガ不慮ノ怨恨デ明石源内武者定明ニ殺サレタ際、勢至丸ハ隠レテ賊ヲ射リ、ソノ眉間ニ負傷サセタノデ、定明ハ遂ニ免レヌト覺リ亡命シテ零落ノ中ニ死ンダ。コレガ動機デ、勢至丸ハ遂ニ世ヲ捨テ、延暦寺ノ学徒観覺ニツキ、一十五歳デ僧トナリ、更ニ西塔黒谷ノ叡空ニツキ、法然坊ト改称シ、転ジテ奈良ノ藏俊ニツキ、唯識ヲ学ビ、新タニ承安五年ソノ四十三歳ノ

時、浄土専念宗ヲ唱へ、盛二世ノ攻撃ヲ受ケタガ、忽チ高倉天皇ニ召サレ、又、後白河天皇ニ招カレ、難行苦行ノ結果、遂ニ浄土宗ヲシテ一代ヲ風靡サセルニ至リ、数多ノ学徒ヲ有スルニ至ツタ所、取リ締マリノ自由ニ過ギタ結果、ソノ学徒中安樂坊、住蓮坊等ガ官女ヲ誘惑スルニ至リ、源空ニ反対スル僧俗ガ一斉ニ蜂起シテ源空ヲ攻撃シタノデ、土御門天皇モ逆鱗サレ、安樂住蓮二人ヲ斬リ、承元元年二月、源空ヲ讃岐国ニ流シ、五年ノ後、漸ク帰洛サセタガ、ソノ翌建暦二年正月二十五日遂ニ八十歳デ寂。寂後浄土宗ガ次第二全国ニ行ハレルニ至ツタ結果、五百年ヲ経テ元禄一十年、勅命ニヨツテ大師号ヲ贈ラレ、円光大師ト称ヘシメラレ、更ニ宝永八年ニ至リ、ソノ別号ノ上ニ東漸ノ二字ガ追加サレタ。別ニ源空一代ノ事業トシテハ京都東山、大谷寺華頂山、知恩院ヲ建テタコトデ、今日ニ至ルマデ寺ハ浄土宗ノ本寺トシテ立ツ。

（『大辞典』）

タイトルが示すように、「勢至丸」はこの源空が「法然坊ト改称」するまでの事蹟を扱ったもので、そこに架空の存在である袖代という定明の遺児を登場させて一編の筋立てを編んでいる。

法然の伝記は、『法然上人行状画図』（寛永二二）や『黒谷法然上人一代記』（寛文六）をはじめ、江戸期以降さまざまなのが刊行されているが、法然の誕生から比叡山に登るまでの事蹟のあらまはは共通している、美妙がどのような本を参照したか特定することはできない。

本作「勢至丸」は、書写山の開祖の事蹟に取材した「性空上人」（『文芸倶楽部』第十卷第二号、明治三七・一・一五）により文壇の表舞台への復帰

を果した美妙が、硯友社時代からの旧知で『文芸倶楽部』の編輯を担当していた石橋思案に、「性空上人」に引き続いて「上人物」を売り込もうとしたもので、その間の詳しい経緯を、当時の美妙の日記（『美妙斎日記』、『クオタリイ日本文学』第二輯、一九三三・七）から窺うことができる。

思案宛九月のくらぶに出すつもりの小説買入の有無につきその家へ宛照会する返信はかき料として二銭切手封入（明治三七・七・一五）石ばしから返書、七八十枚の原稿起草してくれと、後七時半返事投函、題は勢至丸、二十五六日頃持参、就ては在館の時間知らせてくれと返信料封入してやる（七・二〇）

新小説「勢至丸」すこし起稿した丈（七・二二）

勢至丸前稿悉皆廃止、又あらたに起草しはじめる（七・二四）

博文館で石橋に逢ふ、勢至丸稿料六十二円四十銭十三（七・三〇）

くらぶ二月一日のもの来る。「勢至丸」が載つて居る（明治三八・

二・三三）

これによると、本作の起稿は明治三十七年七月二十一日で、書き直しを経て七十八枚の原稿を思案に渡したのは七月三十日。美妙が渡したのはおそらく草稿と同じく一枚当り四百字を書いた原稿で、原稿一枚につき八十銭の金を美妙は手に入れたことになる。掲載が翌年二月まで延びたのは、一周忌を迎えた尾崎紅葉を追憶する美妙の文章を十月の『文芸倶楽部』に載せることにしたため、後回しにされたと思われる。

『文芸倶楽部』第十一卷第三号（明治三八・二）に掲載された「勢至丸」は、「一」から「六」までの本文に、山中古洞による見開きの挿絵を二

つはさんでいた。本文は他の『文芸倶楽部』掲載作品と同じく総ルビ。タイトルは「勢至丸」（のち、『美妙叢書』（明治四四・八、博文館）に収めるにあたってタイトルのルビは省略されたが、本文中では「せいしまる」とルビをふっている）。梗概は以下の通り。

夏の夜ふけ、ふと目を覚まして美しい「雀小弓」にみとれていた勢至丸は、家に忍びこんできた曲者が白刃を手にして父時国の部屋をうかがっているのを見つけ、矢を放った。矢は男のこめかみに当たったが、男はそのまま闇の中へ消えた（二）。家中が集まった中で、勢至丸がその曲者が「源内武者の定明」であつたことを告げると、父はその日の帰り道に定明と三条河原で出会い、道をふさいで悪口雑言を浴びせた定明をたたきふせて溝に落としたのを怨んだことだろうという。行きすぎた仕打ちを悔いつつも危急を救ってくれた感謝を述べる父に向かって、勢至丸はそれならば自分は「悪の味方」をしたに過ぎず、定明の刃をこの身に受けることこそが子としての道であるといい、父に定明へ謝罪するよう求める。父はそれを承諾し、「稀有の孝子」であると勢至丸の言動に感じ入る（三）。時国を殺しそこない万事休したと観念した定明は、みずから命を絶つことを心に決め、親一人子一人の暮しを営んできた娘の袖代の寝顔に見入る。父は娘に「土民」が虫けらのように扱われるこの世の中で反抗を企てるような「白痴者」を父に持った不運と諦めてくれと告げる（三三）。その翌日、定明が咽喉を突いて自害したことを知った時国は、勢至丸とともに、邸に招いた菩提寺の僧観覚に会い、勢至丸が自分と父の罪を滅ぼすために出家することを望んでいると申し出る。「菩

薩の化身」と叫んだ観覚だったが、出家する前にまず定明の遺児を家に迎えるべきだと説く。そうした申し出をとて袖代が受け入れまいと勢至丸がいうと、観覚もそれを認め、即座に勢至丸を出家させる(四)。父を亡くした袖代は、乳母だった人の里である嵯峨の百姓家に引き取られ、狂おしい思いを秘めて賤しい仕事に従う月日を過ごす。やがて十九歳になった時、袖代は比叡山に勢至丸を探しに行く。父の怨みを返したいのと、父の所業がもたなつての結果だと勢至丸に詫びたいのと、気持ちは揺らいでいる。山中で二人は出会い、互いの名を告げる。怨みを返したいという袖代に向かって、出家したのは「死罪を待ち受けるそれ迄の牢獄に在るつもり」だったからだといった勢至丸は、崖の際の巖に立ち、袖代に突き落とすよう促すが、その心根を知った袖代は心を改め、懐の短刀を差し出し勢至丸を許す。還俗して袖代を救うべく夫婦になりたいと勢至丸はいうが、返事を明日の朝まで延ばして袖代は別れる(五)。勢至丸と別れた場所に戻った袖代は、自分風情のために未来ある勢至丸を台無しにしてしまうことはできないと心を決め、崖から身を投げて死ぬ。袖代の死に勢至丸は「喪神」し、一時仏法をそしめるなどのふるまいに及んだが、叡山を出てまた修行し、浄土宗を開いた。「最う勢至丸の称呼でない。号は法然字は源空、靈界の偉人である」(六)。

国文学研究資料館が所蔵する「勢至丸」草稿(ユ1-88)は、薄手の半紙二十五枚(ただし、末尾の二葉は半紙を二つに切ったもの)。中央から二つ折にするが綴じられてはいない。本文は墨書であり、一部、朱または鉛筆による書き入れがある。二枚目から二十三枚目まで、左下隅にアラ

ビア数字で「2」から「23」までの番号を記す。タイトルは「勢至丸^{せいし丸}」。本文は一枚につき二十行で一行二十字。ふりがなを部分的に施す。なお、現在残っている美妙の草稿は浄書原稿がほとんどであり、本草稿のような推敲過程を留めるものは知られていない。

本草稿は、袖代が比叡山にたどりつく直前までの部分が書かれ、以降は筋書きのメモを記すのみであるが、書かれた部分は「文芸倶楽部」に掲載された「五」の途中まで達している。ストーリーの一部に異同が見られるものの、「文芸倶楽部」掲載本文の三分の一程度の分量しかない草稿と「文芸倶楽部」掲載本文とで物語の大筋は動いておらず、草稿の字句を改め、叙述を増補し、ストーリーを一部改変・整序し、末尾の袖代の死をめぐるてんまつと勢至丸の後日談を書き足すことによって定稿である「文芸倶楽部」掲載原稿が作られたものと認められる。執筆に要した日時が十日であったことと、本草稿に書き直しのための覚えが書き込まれていることを考慮すると、原稿にとりかかって四日目に「悉皆廃止」したという「前稿」が本草稿である可能性が高い。

「文芸倶楽部」の第一回から第六回までと本草稿との主な異同は次のとおり。

—

草稿の五枚目半ばに朱書された「第一回」という覚えにしたがつて書き直された。手もとに届いた弓矢を愛でるさまなどが補われた外、一部表現を改めている。本文の一部を掲げて、その異同を具体的に示す。

(点線部は草稿から表現を改めた箇所、傍線部は草稿に新たに補った箇所。)

枕許をふつと見て忽ちひとり莞爾とした。枕許には小弓が有る。添へてまた小さな箭も素より有る。小弓は美しい重藤の蠟塗に、箭は鷹の選り羽である。外でも無し、その弓と箭とは今日しかも出来上がったとして其職の者の手から届いて来た品である。寐るとは為つても、嬉しさに身から離せず、枕許にさへ実は置いた。目に入らぬ内は兎もかくも、既に目に入つたと為つて、何うして手が出せずに済む？ 手を出さうと思へばこそ我知らずの前触れにまづ莞爾とした笑顔が出た。可し、如何にも可しとみづから己れに令下した。手は心得るまでも無くすぐ伸びた。弓も箭も引き寄せた。

引き寄せてつく／＼見た。返す／＼重藤である、蠟塗である。藤は新しい、そして白い。塗りも仕上げたばかり、そこで光る。黒光りの水の垂れさうな所へ磨き抜いた白である。黒も黒ければ白も白い、相譲らぬ美しくさは是である。嬉しい！ 見惚れても猶足りぬ。

何時まで見たら限りが付くか。塗り色を斜にして見るか。短檠の光りを照り返す。稲妻も飛ぶ、金蛇も展す。どうして／＼夫どころか、見る人その人の顔をさへあり／＼と映し出す。映るその顔の長さは何うだ。横五六分の縦二寸、塗り面の上に引き伸ばされた、さりとて面白い顔に爲る。藤の巻数、然らば幾重？ 一つ、二つ、三つで離れて、四つ五つを一組みにして、その一組みが一つ二つ三つ四つ、残らずで十七か。箭羽は鷹の選り羽の証據、斑揃ひとは、勿

體無、大将分でもうツかりと使はぬ品！

ためつすがめつ楽しみ見た。さも無くても寝られなかつた。まして愉快が昂ぶつた。逆も閉ぢる眼でも無い。拝見が終ると共に、今度は引いて見たく爲る。そく／＼する嬉しさには引いて見るさへ胸どき／＼。空紋りにまづ怖々、引いて見ると応へが佳い。空紋りの指あきの味ながらも反撥の英氣満々たるその応へ力が指に疼いて、わな／＼が如く振へるが如く、まだ／＼切つて話して見もせぬ前から、鉄壁も大丈夫貫けるとの気持ちもした。思へば鉄壁どころでは無かつた。勢至丸その人の現の親源時国朝臣の命附け狙ふ曲者をば、嗚呼、実はその弓その箭の力に因つて、追退ける事と爲るべき運命が既に催して居たものを！

姑らく其儘勢至丸はうツとりして余念無く只その弓箭に見惚れて居た。その余念無い耳ながら不図聞き付けた音が有る。音——人ののである。忍び足の——人のである。椽の外れを誰か知らぬが、忍んで通る人が有る。

二

草稿の五枚目左上部に「父との問答」と記されているように、事件をめぐる父と勢至丸とのやりとりが定稿では細かく引き延ばされ、より「問答」らしく書き直されている。たとえば、勢至丸から曲者が定明であつたことを告げられた際の時国の反応は、草稿では、その日の定明とのいさかきを一同に語つてきかせるシーンへとただちに接続されてい

る。

「源内武者の定明です。」

「うむ」とばかり反り返つて、時国殆ど虚空を擱んで、「間違ひの無い定明だ。確、確、貴様の目が。」

「間ちがひ有りますまい。」

「無い所の沙汰で無い。よし、勢至丸、紛紜の色々を、されば、貴様に晰した所が分かりにくい。一同に晰す。皆聞けく。小刀自（時国の夫人）には稍咄した。大輔（時国の家臣）には始めてだ。落ちて着いて篤と聞け！」

定稿では、定明の名を聞いた時国が、意趣返しだという直感を口に、さらに勢至丸がそれを聞いたです、というように、より曲折した展開とされている。また、助動詞「ぢや」を多用した文体に改めている。

「それく、夫ならば全くぢや。確かぢや、如何にも貴様の目は遠はぬ。然うかく、定明か、己れ定明の奴の怨念か？思へばく己れやれ、己れ定明め卑怯にも怨みを遂に晴らさうとて、妬刃合はせて来たのぢやな。」

「さすれば、定明から返される其怨みの種と云ふもの、夫をば阿父さまが御蒔きにでも為りましたか。」

「怨みの種と云は云ふ……」と時国言葉はたちろいだ。

「怨みの種と云は云ふ、云はずば云はぬ、何れです。」

「言葉咎めせず、さらば聞け！ まだく心一つに秘めて、誰にも話して聞かせな。今はや秘める場合でない、誰にも咄す。皆よ

く聞け！」

草稿の六枚目右上部に鉛筆書きされた執筆プランは、草稿執筆時点で構想をメモしたものと思われるが、定稿ではさらに推敲が加えられている。勢至丸の働きにより救われたと時国が感謝する場面（時国が勢至に感謝する処）と、父の話を聞いた勢至丸が一転して自分のしたことを悔いて父をいさめる場面（勢至が悪に覚したを悔いる処）とに对比的に叙述をまとめあげた上で、続く勢至丸が出家するに至る経緯へとストーリーを円滑につなげようとする。そんな事情があると知っていたら定明を無暗に弓で射たりはせず、自分の身にその刃を受けるべきだったと勢至丸が語り出すくだりは、草稿では、

「そして貴様は何うするのだ。」

「定時の白刃の前へ私の身を投げ出します。」

早には時国二の句が継げぬ。

と、いたって素っ気ないが、定稿では勢至丸のいうことをとつさにのみこめない時国とのやりとりが書き加えられ、尋常でない勢至丸の言動の分かりにくさを、かれがウルトラ化された考の論理を体现する「聖者」であることへと収斂していくための配慮がなされている。

「さすれば何う……何を為る？」

「定明が忍び込んで来て、いよく阿父さまの御身體にその怨みの切尖を御中で申す段とならば、其処へ私は身を投げ出して、定明の思ふ存分に致させます。」

余りの言葉、猶解しかねて、「思ふ存分誰の身を？」

「身を？ 私のでございます。」

「わたくしとは、あの、貴様のか？」

「わたくしの身を白刃しらばの前……」

「投げ出して？」

「斬きられます！」

一連の法然伝では、稲岡の庄を知行していた源内武者定明が家柄を誇っていることをさかなかつた時国を夜襲したとされており、「強者として弱者を圧」(草稿八)という「勢至丸」における時国と定明の関係はそれとは逆。また、法然伝では、定明との戦いで深手を負った時国が、定明に対する怨みを捨てるよう遺言したことによって勢至丸が出家することになっており、親の罪障を滅ぼすために俗世を捨てる決心をする「勢至丸」のプロットはそれと大きく異なる。「勢至が惡に覺したを悔いる處」は、「勢至丸」が法然伝から決定的に離陸していくポイントである。観音の申し子として誕生した勢至丸が仏の道をたどっていくのが法然伝であるとすれば、美妙の「勢至丸」は、「聖者」として半ば神格化されているとはいえ、誕生にまつわる奇瑞なども語られることはなく、あくまで人の子である。

三

定明に謝罪するという時国の約束が果たされないうちに、身の破滅を覚った定明が死を決心して一人娘の袖代に別れをつける場面は、草稿の六枚目にある執筆プランにはない。草稿では、定明の逐電に時国の謝罪

が間に合わなかったことが連続して語られているが、「コレカラ次回二ウツリ、ソノ中へ定時が娘にわかれをつける處をこれから挿む」(草稿十二)・「かき直す」(草稿十四)との書き入れの通り、定明の逐電のくだりを独立させ、袖代へのくどきを大幅に書き足している。なお、法然伝においては、逐電した定明は前非を悔いてひたすら念仏に専念し往生を遂げたとされており、その娘についての言及はない。また、これから自分を「宿場馬」にするのだという定稿で加わった定明の述懐には、動物虐待をめぐる美妙の思いが投影されているとみていい。

四

草稿では、定明の死を知った時国が観覺を家に呼んで善後策を相談するというふうに叙述が時間軸に沿って運ばれるが、定稿では、時国ら三人が語り合う場面の中で定明の死について触れられるよう改められている。定明の死を入水としていた草稿を、喉を突いて死んだと改める。また、草稿では勢至丸の気持ちを汲んだ観覺が、親とみずからの過誤を背負おうとする勢至丸に残された道は俗世を捨てることしかないと言及して彼れの出家が決するのに対し、定稿では、当面の課題として残された袖代を時国のもとに保護することに触れられ(袖代の気持ちを付度して結局この方策は採用されない)、出家への過程が複雑化されるとともに、クライマックスでの勢至丸と袖代との出会い場面へむけた伏線となつている。「勢至に袖代と縁結べといふ」という書き込み(草稿十七)は、こうした方向への書き直しへのメモである。なお、観覺は法然伝にもやはり父を

亡くした勢至丸が身を寄せる菩提寺の僧として登場する。

五・六

草稿は、袖代が比叡山へたどりつく直前までで中絶し、以降については、筋書きのメモを記すのみ。それによると、比叡山にたどり着いた袖代が、「悶絶」していた源空（勢至丸）を見つけて介抱したことが機縁となつて、源空の心に迷いが生じ、袖代に自分の妻となれというが、死んだ父に対してその申し出は受けられない袖代は悩んだ末に死を決する、という構想であつたことが知れるが、袖代の死には言及されていない。定稿では、二人の山中での出会いから源空の「悶絶」という契機が取り去られ、袖代の投身がそこにいたる心中のとつおいつとともに濁世からの離脱＝昇天として、大幅に加筆されて描かれ、物語は終わっている。なお、草稿の筋書きメモのうち、勢至丸の授戒の際に皇円がその横暴をいましめ、定明殺害のいきさつを聞き出したという、後日談かと思われるストーリーは定稿では採用されず、袖代の死によつて一旦仏法をそしるようになった勢至丸が、仁和寺の慶雅と出会つて悟りを開いて法然となつたと結ばれている。

草稿における逐電前の父との別れの場面が、定稿では、夢見心地でのそれに改められている。定明の死が入水から自刃へと変更されたことにもない、翌朝室内にある父の死体を袖代がみつけることに定稿で改変。成長した袖代が身を寄せていた家を出て比叡山をめざすところで、彼女の心中での葛藤を書き加える。

翻刻凡例

墨または朱で消した箇所を傍線により示した。

推敲の過程で挿入された箇所を「」により示した。

判読できない箇所を□により示し、読みを推定したものについてはその後に「カ」と記した。

勢至丸

山田美妙

晝蒸した丈で蒸し足らぬか、残暑意地わるく
餘熱の火と煽つて、都の夜を猶蒸した。庭の
何處でか蚯蚓か何かちい／＼鳴く。その聲も
粘るやうである。只でも寐ぐるしい。まして
氣に爲る事が有る。どうして快く目が合はう。
父朝臣が退朝されて、御機嫌はなほだ宜しく
ない。苦り切つて御出でなされる。勢至丸た
る身その兒心にも何うも苦勞に爲つてならぬ。
まして御退朝の時刻も遅い。何事か御意に濟
まぬやうな悪い事でも御有りなのか。と云つ
て、御問ひ申しても御答へ無い。御答への無
いと云ふ丈が猶氣になる種では無からうか。
と思ふ、斯くや思ふ、どう思ふ、斯う思ふ、
いよく益目は合はぬ。寐よとの鐘か？も
う疾うに聞いた。否、子の刻の水時計が箭さ
きふるへて鈴も打った。それでも是でも矢張

勢至丸

山田美妙

晝蒸した丈で蒸し足らぬか、残暑意地わるく
餘熱の火を煽つて、都の夜を猶蒸した。庭の
何處でか蚯蚓か何かちい／＼鳴く。その聲も
粘るやうである。只でも寐ぐるしい。まして
氣に爲る事が有る。どうして快く目が合はう。
父朝臣が退朝されて、御機嫌はなほだ宜しく
ない。苦り切つて御出でなされる。勢至丸た
る身その兒心にも何うも苦勞に爲つてならぬ。
まして御退朝の時刻も遅い。何事か御意に濟
まぬやうな悪い事でも御有りなのか。と云つ
て、御問ひ申しても御答へ無い。御答への無
いと云ふ丈が猶氣になる種では無からうか。
と思ふ、斯くや思ふ、どう思ふ、斯う思ふ、
いよく益目は合はぬ。寐よとの鐘か？も
う疾うに聞いた。否、子の刻の水時計が箭さ
きふるへて鈴も打った。それでも是でも矢張

寐られぬ。寐苦しい。汗が出る。身悶える。
日は昇る。夜を守り顔の短髪が御夜伽の御
相手に爲りましやうかと云ひさうな工合ひに
動いて居る。覺束無い。欠が出た。さて横に爲
つて居るのも強面い。勢至丸は稍起きた。
枕許の小弓と箭とをにっこりして引き寄せ
た。外でも無し、その弓箭は今日漸く出来上
がったとて其職の者の手から届けて来た品で
あつた。夜が明けたらば射試しする、まづ祝
ひの一の箭で雀でも射てくれると只々その明
日の朝が楽しみで爲らぬ。寐苦しさに目を覺
ました處で何よりも氣に入つた弓矢が見えた
と云ふ——全で熱湯後の温湯である——ぞつ
とする程又嬉しい。引き寄せて取り上げて、
空絞りに弦を引けば、何處までも反撥の英氣
満々たる應力が手に響いて、疼くが如く動く
が如く、切つて放しもせぬ前からして鐵壁も
それ或ひは抜けるかとの氣持ちがした。尤も
である、鐵壁どころの沙汰では無い、勢至丸
その人の現の親の命付け狙ふ劍曲者を、實は

その弓その箭を以て惱まして呉れるべき運命
 が既に孕んで居たのである。ものを。
 姑らくは其儘うツとりして餘念無く只矢を
 弄んだ。その餘念無い耳ながらふと聞き付け
 た音が有る。音——人のである。忍び足の、
 人のである。椽の外れを、誰か知らぬが、忍
 んで通る人がある。
 今ならば九尺四枚と云ふ處、その頃は或ひ
 は九尺三枚の腰板の明かり障子、その三枚の
 中の一枚をそツと□りに押し明けて、勢至丸
 は稍わづか半面を出して覗いた見た。手遊物
 見たやうな雀小弓が大役に立つと誰が思ふ。
 用意する氣では無く、只それら弓矢を手を持
 ツて居た便宜だけに、即ち勢至丸は其儘で弓
 矢手に持ツたまゝ、差し覗いて見たのである。
 果して人だ！ 曲者だ！
 誰か知らぬが黒い影だ。黒い影が縮んで居
 た——否、動いて居た——這ツて居た。這ツ
 て渡殿造りの廊下角なる一室の間を中を熱心
 に□沿し覗く。覗いて居た。

勢至丸は、この時、
 曲者から此方を偵視するより大層な便宜で
 ある。天か、それ故、曲者は勢至丸に伺はれ
 ると氣が付かぬ。一圖□□□□只己が志す方
 の室内を見込み、睨め込んだ。
 すはや白刃を持つて居る！
 曲者の右の手は短刀を抜きそばめた。
 さう爲て曲者が窺ひ寄つたその室には誰が
 居る？ 父朝臣時國の閨である。閨□へ白刃で
 忍び寄る、奴、只の曲者か！
 勢至丸は濠となる、勢至丸は上氣した。手
 はわな／＼顫へ出した。手の其弓矢を役ツて
 呉れと手が催促で顫へるか。
 「射ツて構はぬ！」 突如決した。
 突如決して實行した。大事は總べて咄嗟に
 成る。好い加減な狙ひである。天がその矢を
 導いたか。好い加減な狙ひどころの結果で無
 い。曲者の顫顫あたりへ確かにその箭は射中
 した。

曲者、しかし、度胸が有る。射中てられても聲さへ立てぬ。猫は殿たれて大抵叫かぬ。曲者ながら猫である。見限りの附けも且早い。射る、中たるの刹那咄咄を早くも見切り時とした。跳ねた、飛んだ、足で躍った。顧慮は窮所でもあらう。箭は、しかし、手遊物なのである。致命と迄は無論行かぬ。闇へとその身を潜らせたなり、植ゑ込みの緩の迷路を縫って、曲者はその身を掻き消した。逃げて其身はその時丈は消えたであらう。永劫の名譽と云ふものも、吁、その時限り消えたとは！

第一回「上郎朱書」

其處までを誰も知らぬ、又思ひもせぬ。何にせよ只菊邸内は沸騰せぬ。した。父朝臣時國をはじめとして奴婢等までも飛び起きて来て、喧嘩過ぎての棒千切りを今更らしく振り回す。

父との問答「上郎朱書、鉛筆で抹消」

「然らば貴様が矢に掛けたので曲者は逃げて行つたのかな」と朝臣はつく／＼我子を見た。見た切り暫時語は絶えた。絶えて其儘日はうるんだ。

翌日の夜②「上郎朱書、②」は鉛筆で抹消

〔以下五行、左側に鉛筆書き〕

定明が一旦逃げ娘の所に至り寝顔にわかれを告げ、泣き出されてよわる所、さかの薬家へ袖代をたのむうき働きをとめ置く事○死骸がうき出したと云ふので結ぶかきおきを書き／＼娘のねがほを見、泣かれて一寸すかし、又書きかけ、又だまし泣く

(2) 以下三行、右隅に鉛筆書き
 ○定明が死骸になつたと聞いた所で始めて時國が
 喧嘩の始末をば
 「以下十五行、右に鉛筆書き」
 はじめ、○時國が勢至に感謝する處、○勢至が惡に／黨したを／悔いる
 處、○そこへ定明／が遺書を／残しても／川へ浮いた／とのしらせか
 くる事、○勢至の□／説が□□／出家と／きまる處
 是々ですと片言交り、子細の要を巧者に摘
 まんで勢至丸は説き立てた。それが何と、子
 供である。子供も、十歳にもならぬ、年
 端でこそ無い、九歳である。「右傍に「真」と朱書」やうやう乳を離れ
 た計り、まだ或ひは乳母の背でむづかりでも
 する齡□□を！
 暫時時國言句も無い。「運だとは云ひなが
 ら、ざりとは／怖ろしいやうな貴様の早
 速□、兎にかく父には現の我子が却ツて命の
 親である。さるにても亦思ひ當たる、その曲
 者の人物だ。些しは面躰でも見たか。」
 「見ました」と屹とした。「其人は知ツた
 人……」
 「以下五行、黒で抹消」
 「貴様の……」
 「源内武者の定明です。」
 「うむ」とばかり反り返つて、時國殆ど虚
 空を掴んで、「間違ひの無い定明だ。確、確、
 貴様の目が。」
 「問ちがひは有りますまい。」
 「無い所の沙汰で無い。よし、勢至丸、紛

紅の色々を、されば、貴様に嘶した所が分
 りにくい。一同に嘶す。皆聞けく。□小刀
 自(時國の夫人「潮書」)には稍咄した。大輔(時國の家臣「潮書」)には
 始めてだ。落ちて着いて驚と聞け！
 「己の今日の退朝が例日より遅かった。そ
 れには大きな譚が有る。曲者もそれが本でだ
 ぞ。今日の□□退朝の路すがら三条河原を過ぎた
 時、端無く己と定時とが路の譲り合ひで諍論
 した。彼奴が路を避け居らぬ。彼奴の身分は
 そもく何？ 稻岡の飼庄の領所、只それ丈
 の小身だ。路譲らぬか無禮なと窘めてやツた
 のが初まりで彼奴も煩悩叩くのだ。賣り言葉
 に買ひ言葉、己の言葉も烈しくなツた。時國
 を誰と思ふ、西三条右大臣源光公の末葉
 と禁裏の御覺えも愛でたい身に哀れ蟻蟻出過
 ぎ居らば轍の下に掛け呉れると一時はあはや
 血もかと思ツた。但しそれとても泡の間だ。
 己の伴たちが人が手取り足取り彼奴をは横へ引き倒
 して、そして□りに又手がはずんで溝の中へ
 □□落とした。それが怨みの、思へば、本だ。

[illegible]

今日の歸館はそれ故遅い。夕餉も咽喉へ敢て通らぬ。むしろ擦り／＼扱くやうで一粒の米粒までが殆ど通るを肯ぜぬ。本能に悔悟の一念一度芥子粒の如く湧いたにせよ、それら悔悟の念ばかりは見る間増大する魔力を持つ。

۱۰
 ۱۱
 ۱۲
 ۱۳
 ۱۴
 ۱۵
 ۱۶
 ۱۷
 ۱۸
 ۱۹
 ۲۰
 ۲۱
 ۲۲
 ۲۳
 ۲۴
 ۲۵
 ۲۶
 ۲۷
 ۲۸
 ۲۹
 ۳۰
 ۳۱
 ۳۲
 ۳۳
 ۳۴
 ۳۵
 ۳۶
 ۳۷
 ۳۸
 ۳۹
 ۴۰
 ۴۱
 ۴۲
 ۴۳
 ۴۴
 ۴۵
 ۴۶
 ۴۷
 ۴۸
 ۴۹
 ۵۰
 ۵۱
 ۵۲
 ۵۳
 ۵۴
 ۵۵
 ۵۶
 ۵۷
 ۵۸
 ۵۹
 ۶۰
 ۶۱
 ۶۲
 ۶۳
 ۶۴
 ۶۵
 ۶۶
 ۶۷
 ۶۸
 ۶۹
 ۷۰
 ۷۱
 ۷۲
 ۷۳
 ۷۴
 ۷۵
 ۷۶
 ۷۷
 ۷۸
 ۷۹
 ۸۰
 ۸۱
 ۸۲
 ۸۳
 ۸۴
 ۸۵
 ۸۶
 ۸۷
 ۸۸
 ۸۹
 ۹۰
 ۹۱
 ۹۲
 ۹۳
 ۹۴
 ۹۵
 ۹۶
 ۹۷
 ۹۸
 ۹۹
 ۱۰۰

勢至丸は頸低れた。その儘無言の沈思である。沈思とは何事か。何か思はくでも有るの

□。時國流石や、解せぬ。

「勢至丸、分かツたか。親が殆ど身を低げる。忝ないと禮云ふぞ。」

「何と云ふぞ、仕くじつたと？」

「悪の味方に？」

「御父さまと云ふ惡の味方に其早まつた兒

勢至丸が我知らずつひ爲つて罪の上塗り致
 しました。
 見る／＼面色變はらせて時國唇□震はせた。
 「惡の味方に爲つたとな？」
 「御やね□ならば申します」と何うでも子供
 でない口ぶり、「阿父さまの御口から聞く。
 間違の無い咄し。定明も悪いか知れず、さり
 ながら其上を掛けて阿父さまの爲され方が全
 くの惡事です。定明がそれを怨んで忍び入ッ
 て來たと云ふ、それも惡事とは思ひながら、
 然うと若し知つたならば、私が出過ぎがまし
 く筋に掛けて重ね／＼定明に憂き目を見せぬ
 所でした。」
 いや／＼子供の口で無い。莊嚴、親はぞッ
 とした。
 「そして貴様は何うするのだ。」
 「定明の白刃の前へ私の身を投げ出しま
 す。」
 是には時國二の句が繼げぬ。
 「親子相救ふべきものは私は私しとても存じ

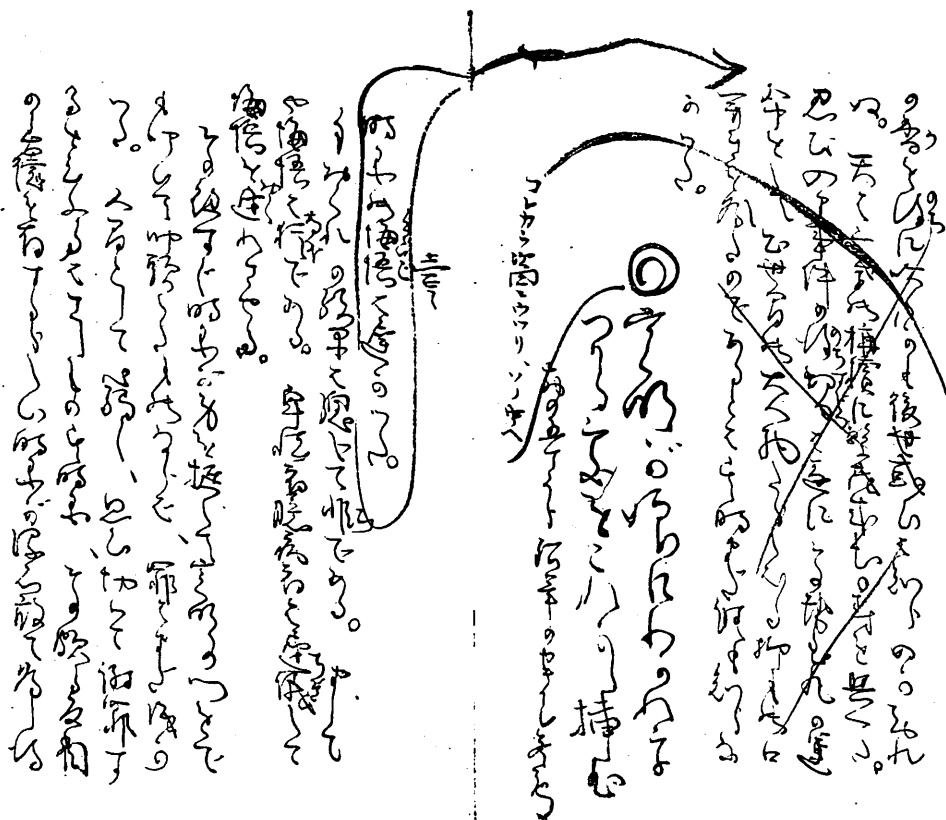
Handwritten text in Urdu script, likely a continuation of the letter or a separate note.

~~梅子~~

泣かずに居られる時國か！ 泣かずに居られる時國か氣高さか！ 時國魂魄こんぱくちゅう中有である。

「それです」と屹とした。

157



〔以下六行、朱で抹消〕

の香を後に吩□かも後世或ひは知らぬか知れぬ。天は二葉の栴檀に繁茂成長の壽を與へた。忍び入り事件の後數日は遂にその勢至丸の運命をして出世間の大人物たらしむる抑もの口開きを爲したのであるとは其時まだ誰も知らなかつた。

◎コレカラ次回ニウツリ、ソノ中へ定明が娘にわかれをつける處をこれから挿む

前の五丁うら鉛筆のカキイレ参考

壹

〔以下の一行を矢印で先の抹消部分へ挿入する〕

時國の悔悟は遅かつた。

手おくれの結果は總じて非である。ましてや悔悟は猶である。卑怯者臆病者は遲儀して悔悟を遅れさせる。

その夜すぐ時國が身を挺して定明の門をでも叩いて叩頭したものならば、罪はまだ淺かつた。人間として心弱く、思ひ切つて謝罪すると云ふ事はさしもの其時國、その頗る反省の美德を有するらしい時國が流石敢て爲し得

す せ り 〇

娘にあふため／にけて來た「右側に書」
かき直す「右上部に朱書」
目に入れても疼く無いと云ふ程な可愛い
一人娘が有る。袖代といふ名でその時十歳、
而も母親の□無い□であ□身であつた。定明の妻は可愛い
娘をその二歳の時後へ遺して歸らぬ旅の身と
なつて後、子に対する不慮の心はいと、定明
に深くもなる、小身の分際とて迎も青雲は望
めぬもの、只々その袖代ばかりを恥かしか
らぬ者にしてとそれがその後の綱であつた。
それ程思ふ娘を残して、どうも縛り首には爲
れぬ。卑怯ともみづから思ふ。思ふが、しか
し其卑怯も事實退引爲らぬ是非無い卑怯とみ
づから付けければ理屈も付いた。恥ぢも□理も
世の道理もいよく窮したと云ふ身に爲つて
何の厭つて居られるか。どうでも毒を食は、
皿、みづから罪を名乗つて出てそれ丈の仕置
きに掛けられる立派な人と爲るよりも、何處
までも娘を庇ひ庇つて切めてその牛にも馬に
も踏まれぬと云ふ處まで——到底親だけの盡
くす丈を盡くしてやると云ふ意氣地無しに爲
るが増しと道理か無理か考へた。

娘にあふため／にけて來た「右側に書」
かき直す「右上部に朱書」
目に入れても疼く無いと云ふ程な可愛い
一人娘が有る。袖代といふ名でその時十歳、
而も母親の□無い□であ□身であつた。定明の妻は可愛い
娘をその二歳の時後へ遺して歸らぬ旅の身と
なつて後、子に対する不慮の心はいと、定明
に深くもなる、小身の分際とて迎も青雲は望
めぬもの、只々その袖代ばかりを恥かしか
らぬ者にしてとそれがその後の綱であつた。
それ程思ふ娘を残して、どうも縛り首には爲
れぬ。卑怯ともみづから思ふ。思ふが、しか
し其卑怯も事實退引爲らぬ是非無い卑怯とみ
づから付けければ理屈も付いた。恥ぢも□理も
世の道理もいよく窮したと云ふ身に爲つて
何の厭つて居られるか。どうでも毒を食は、
皿、みづから罪を名乗つて出てそれ丈の仕置
きに掛けられる立派な人と爲るよりも、何處
までも娘を庇ひ庇つて切めてその牛にも馬に
も踏まれぬと云ふ處まで——到底親だけの盡
くす丈を盡くしてやると云ふ意氣地無しに爲
るが増しと道理か無理か考へた。

即夜逐電して仕舞った。素より袖代を連れてある。殆ど一足違ひに爲つて、時國は使ひの者を定明の家へと遣はした。即ち早追ひ付かぬ。時國は落膽した。落膽も落膽、場合ひが場合ひ、無論一とほりの落膽では無かつた。一方ならず氣に爲つた。
 コレカラ勢至の出家となる〔右部に墨書〕
 早さうして氣に爲り出すと、最早果しが無くなつた。種々さまざまの想像が有想、無想の□「波」い絵を時國の腦底へ取り換へ引き換へ現はした。逐電となる迄には何れ程此身を怨んだか、それとも娘を運れた儘、淵川の身と爲つても爲りは爲せぬかと妙な事まで考へた。
 偶然に其考へが的中したとは思儀である。四五日が苦痛に過ぎて、六日目あたりの世の噂は定明溺死□と傳□つて來た。
 定明は死骸と爲つて加茂川へ浮き出した。袖代は、然らば、何うしたらう。同じ藻屑かとも思ふが、是は皆くれ死骸も出ぬ。死人に口の無い事として、何故さうまで思ひ迫つたかは確かには分からぬもの、又さう確かに分

からぬ丈その投身の原因が□たる中に察せられる。察し中たツたか何うか夫とても又分からぬ。分からぬのが又却ツて分かつた様に思はれる。時國惱亂はじめた。最う傍人に相談されぬ。悶えて悶えたその結句、善智識の意見を問ふ外、手段は無いと考へて了。かねてから畏敬する菩提寺の觀覺和尚、それに相談する外は無いと苦しみ／＼意を決した。使ひを立て、和尚を□呼んだ。觀覺委細聞き取ツた。聞き取るも聞き取る、始めは嗟歎のみである。やがて眉顰めたのみである。末に至ツて勢至丸□□のその夜の言葉、即ち或ひは父の罪の賠償には敵人の白刃の下、「子たる其勢至丸は」身を投げ出したかつたとの一句を聞いて、聲を放ツて泣き出した。

「勢至丸」とばかりの涙聲、和尚は勢至の手を執ツた。そして其顔つく／＼見た。「菩薩の化身！」と絶叫した。

時國その身を揺り出した。

「勢至丸か勢至丸！」と觀覺凄じ聲絞ツた。

勢至丸

五十六

「時國殿は泣かれるか」と觀覺涙掻き拂つた。さう云ふ私も斯くは泣く。但し二様の涙ぢやぞ。時國殿の澁く涙は端無くも人間の理に責められて、我兒を捨てる破滅となつた、其心残りの煩惱から浸潤み出す丈の臭い水ぢや。觀覺の滴らす涙は大勢至の大智慧に肝から髓から挾られて、精華乃ち絞り出されて淨く流れ出した圓伽なのぢや。勢至丸を見よ。泣きもせぬ、悲しみもせぬ、歎きもせぬ。大満足が心に在る。親のために敵攘つた。孝、その一つをまづ遂げた。親のために罪を負ひ、己れの身をば塵外に捨て、回向功德を爲うとする。孝、その二つをまた遂げた。疚しい處が何處に在る。照る夜は照る月の照りは雲の有無に頓着せぬ。悲しみも即ち無い。勢至丸が只それぢや。然らば改めて勢至に問ふ。貴様、まことに心から此世を捨てる氣が有るのか。捨て、何うする心底か。」觀覺態度は屹とした。

「問ふて何うする御心か？」と勢至丸の囁

雁が鳴く。杜鵑が啼く。寒苦を告げる鳥が啼く。一年の餘所の何の聲でも泣きの涙の孤兒の身には同じ思ひのそれとのみ只聞き做されるのみである。袖代は實に孤兒である。親に捨てられたのである。捨てられたとは後で知った。捨てられた其時は夢にも知らぬ。後に至つてつく／＼思へば、親定明はそれと無く別かれを娘に告げ知らせた。何故か知らぬが眞夜中過ぎに袖代は揺り起こされた。子心にも驚いて目を覺ませば、親の右の顚額には血の塊りが附いて居た。血の塊りとも見たもの、それとも藥かとも思はつた。「袖代、睡からうが、起こしたぞ。己は一寸所用が有つて是から三条へと赴く。宜しいか」とのみ云つた。袖代は殆ど合點が行かぬ。しかし何うやら悲しく爲つた。「明日にして」とだけは云つた。「急ぎだ」とのみ答へた。そして親は立ち上がりさま、軽く娘の頭を撫でた。その撫でた手が何うし

た譯か、譬へ様も無く柔かつた。不斷も頭は撫でられた。その時ほどの柔かさはつひぞく無かつた處□事とて、又何うやら胸迫ツて、袖代は殆ど泣き出した。泣き出したとは云ふものの、敢て引き留めるとも爲なかつた。後に思へば口惜しい。その時が親子の別かれである。待ツても親は返歸らぬ。數日^{すじつ}で親は死骸である。

父より外に身寄りも無い身、僅ばかりの縁もと乳を貰つたと云ふを蔓に袖代は都からの

片田舎、嵯峨の農家に引き取られた。引き取られたと云ふ、即ち、手足を伸ばされる(と云ふ)丈である。小身にせよ父定明は土民で無い。娘の袖代十歳^{じゅうさい}から先は賤^{せん}の女に成り果てた。草も刈る、牛も逐ふ、柴も背負ふ、絲も繰る、只食はせられると云ふ丈の無賃^{むせん}の工女^{こうにょ}の身に爲ツた。さりながら泥に差しても月影はやはり清い。賤^{せん}の手業^{てわざ}に慣れても、天與の美貌は消え失せぬ。年頃になるほど猶其美しくしき照りはえた。最う生^{なま}めいた事など云ふ若者□共も數多有る。

見て楽しむ。如何さま人は
 笑つて居る。その、しかし、笑ふのは其人だ
 けが可笑しくて獨り笑ふとしか見えぬ。袖代
 △のやうな不運な身には直それを冷かし笑ひと
 代へて差し向けるとしか見做されぬ。
 女の足の事とて五日掛かつて遂に比叡山へ
 着いた。着いて最う胸は轟いた。その山に
 或る人が居ると聞くものを。
 或る人とは誰であらう。されば、或る人と
 は誰であらうか知ら、或る人と云ふ、誰と云
 ふ、いづれも自問自答である、それで何うや
 ら氣も咎める。或る人とは外でも無い、親を
 射た勢至丸！
 無我で袖代は勢至丸をばその叡山へと尋ね
 て來た。
 尋ねて來て何うする氣か。されば自身にも
 よく分からぬ。ぐつと急ぎ込んで考へると、
 どうでも勢至に怨みが有る。零落は誰の御陰
 げか。差し寄つて怨みを返したい。落ち着い
 て又考へると、勢至に怨みは殆ど無い。零落

[illegible]

は身から招いたのである。差し寄つて、勢至その人をば怨まぬ旨また告げた。兩方を一度に思へば水火こもぐ一齊に掻きまはす様な氣持ちである。兩矛盾を殆ど一時に胸で闘か□はせるやうな心である。未決の心が既決の心と一緒に胸に□〔携カ〕へられて、足も精神も總身も□中有を迷つて來たのである。それでいざと爲つたら何うか。

介抱を受けて源空心迷ひ女を信したい氣になり、女をわが妻たれと云ひ、女はその心をうれしく思ふと共にまた亡父に對する道としてその心に行ふにも忍びず、一日の猶豫を乞ひ、一夜懊惱し、終に死を決し、遺書を山麓の老女に托して源空へ托した

皇阿闍梨から授戒の時、阿闍梨くはしく経歴を咄口し勢至丸の横暴をいましめる。それらの傍から定明殺害の始末を聞出す